

まんだら通信

第230号 (通巻265号)

平成27年08月 西暦2015年 佛暦2581年 皇紀2675年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高栴 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

敗戦後七十年

八月になると、NHKなどが毎年のように大東亜戦争を話題にします。結論は大抵「軍部の先走りや許したから、惨めな負け方をした。だから、戦争してはならない。」というものです。

朝日新聞と、進歩的文化人といわれる人々も、人の命は地球の重さと同じだから、戦争はいかん、と言います。戦わずに済む方法はありますか、と聞くと「平和憲法に書いてあるから」というだけで、どうも答えになっていません。その憲法には、前文に「世界中の国はみんないい人ばかりだから」といい、それを受け

て第九条には、従って我々は軍備を持つなことはしません、ということになりますね。恥ずかしげもなくこんなウソを言う憲法も憲法ですが、憲法に「平和」と書けば平和になるのなら、こんなお気楽な話はありません。その証拠にこの七十年、一時的にも世界から戦争の種が尽きたことはありません。本当に幸いなことに日本は平和に過ぎて来ましたが、それは憲法のせいではなく『日米安全保障条約』という、アメリカの武力のお陰でした。

ところでこの際、何故アメリカという超巨大国と戦うことになったのか、考えるのは大事なことだと思います。アメリカ、特に時の大統領フランクリン・デラノ・ルーズベルトは、病的といわれるほどの日本人嫌いだったそうです。ところが困ったことに「私は戦争をしません」という公約で大統領になりましたから、自分から仕掛けるわけに行きません。そこでABC包囲網などで錫や鉄、ゴム、石油など、日本にとつて命に係わる大事な物資の徹底的な禁輸政策を実行しました。その仕上げが『ハル・ノート』という最後通牒だったといわれます。

この時、ルーズベルトは気付いていなかったかも知れませんが、公共心強く誇り高く、愛する人のためなら命も投げ出せる、日本人の心という虎の尾を踏んでしまったのです。真珠湾攻撃（表向き日本のだまし討ちといわれますが、ルーズベルトは無線傍受で知っていました）で始まった太平洋戦争は、アメリカの圧勝でした。でも、この戦争でアメリカが手に入れたものは何だったのでしょうか。



植民地フィリピンを失いました。若いアメリカ兵42万人を失いました。日本兵50〜100万人を殺しました。

民間人の死者はアメリカ一七〇〇人。日本の民間人の死者は二五〇〜三〇〇万人に上ります。この数字の違いは真珠湾攻撃では、日本軍は鉄道や病院など民間施設への攻撃を避けたことに對し、アメリカは国際法に違反して、各都市などにじゅうたん爆撃をしました。原子爆弾という許しがたい武器も使いました。

またスターリンを甘く見た結果、シナ大陸と朝鮮半島に、共産党政権という独裁国家を生むことになりました。アメリカは、手に入れたものよりも失ったものの方が、圧倒的に多かったことになるでしょう。

第二次大戦を全体で見れば、日本を戦争に引きずり込んだことで、イギリス、フランス、オランダなど、アジアにある白人国家の植民地がすべて独立してしまい、その波はアフリカや中東まで及んで、ことごとく利権を失い、勝ったはずなのに貧乏になってしまいました。何より腹に据えかねることは、有色人種から神のように思われていた自分たち白人が、「猿のような」と蔑んでいた、黄色い日本人に敗れたことの意味は、私たちの想像以上だったでしょう。

英米の有力紙の東京支局長を歴任した、イギリスの大記者ヘンリー・スコット・ストークスさんはご自分の著書『連合国戦勝史観の虚妄』（祥伝社）で「日本は欧米のアジアの植民地を占領し、宣教師のような使命感で、アジア諸民族を独立に導いた。諸民族に民族平等という全く新しい概念を示して、あつという間にその目標を実現させた。それは植民地支配という動機とは全く異なっていた。日本はアジア諸民族が独立することを切望していた。これは紛れもない事実だ。アジアの諸民族にも独立への期待が強くあつた。：日本軍は大英帝国を崩壊させた。イギリス国民の誰一人として、そのようなことが現実起ころうとは思っていません。それが現実であると知った時の衝撃と屈辱は察するに余りある。」

この七月に発行されたばかりの『人種戦争』

（祥伝社）の後書きに、訳者が引用したイギリスの有名な歴史学者アーノルド・トインビーの言葉があります。

「日本は第二次大戦において、自国ではなく大東亜共栄圏の諸民族に、思いがけない恵みをもたらした。それまで、アジアアフリカを二〇〇年の長きにわたって支配してきた西洋人は、無敵で、あたかも神のような存在だと信じられて来たが、日本人は人類の面前ではそうではなかったことを、証明してしまった。これはまさに歴史的な偉業であった。日本は、白人のアジア侵略を止めるどころか、帝国主義と植民地主義と人種差別に終止符を打つことを成し遂げた。」と。

世界的には不思議なことに、日本の学校では、一番肝心の明治以来の歴史を教えません。この国の本当の姿を知ることが、後に続く子孫と世界のためにも大切なことだと思えます。少なくとも、六月号で紹介した『おじいちゃん戦争のことを教えて』をお読み戴くことをお勧めしたいと思います。

私の歴史勉強は、独学のみです。間違ひなどあるでしょう。そのような時はご意見をどんどんお聞かせくださいませう。

にっぽん人情小噺 三遊亭鳳豊 第一一五話 あんちゃん

最近、お年寄りが元氣だと思いませんか。村の渡しの船頭さんは、いくつでした？ たしか、御年六十のおじいさんでしたよ。年はとつても、お舟を漕ぐ時は元氣一杯なんですよ。ということは、他は耄碌していったってこと、ですかね？

先日、私の知り合いの七十七歳のお姉さんが久しぶりに小学校のクラス会に出かけまして、それはそれは楽しかったと言っていました。

「わー、ミヨちゃん、久しぶり」「あら、ヨシちゃん、若いわー」「若くないわよ、喜寿よ」「あなたも喜寿なの。私も喜寿よ。そしたら、参加者が次々と集まってきました」「え、私も喜寿よ」「あら、私も」「へえ、こんな偶然って世

の中にあるのね」って大騒ぎになったって。

クラス会ですもん、ほとんど同じ年でしょうよ。こういうのを私たちは「キシユだらけの人生」と言ってますが……。

さて今日は、岩手県で農家民宿をやっている「あんちゃん」の話をしたと思います。

あんちゃんは、岩手県一関市藤沢という、一関市と合併した山間部の集落の生まれで、もちろん、いまでもそこで暮らしています。年は、七十歳をひとつふたつ越したくらい。

家は、代々農家ですが、山あいの村の農家は生活がかなり苦しいので、集落の八十あまりの農家はいまや兼業で、農業だけでは食べていけないといっています。

あんちゃんは、七人きょうだいで、上から三番目ですが、上が姉ふたりだから、長男。次が二人の妹と二人の弟。しかも、下の弟たちとはかなり年が離れていることもあって、あんちゃんは子供の頃から、「お前頼むぞ」という無言のプレッシャーを感じていたそうです。それというのも、あんちゃんのおとうさんが、どちらかというと野良仕事より、組合運動という、いわゆる政治活動に熱心だったために、畑仕事はおかあさんの細腕に頼らざるをえなかったからです。

おかあさんは、早朝、まだ子供たちが寝ている間に畑でひと仕事をして帰ってきてから、朝の食事の支度。そして、上の子供たちを学校に出すと、洗濯、掃除。赤ちゃんがいれば、授乳。そして、どこの農家のおかあさんもそうであるように、小さな子供を上の子に子守させながら、暗くなるまで畑で働いていました。家で養蚕をやっていた時は、お蚕の世話でそれはそれは大変だったようです。養蚕って、手間がかかるんだそうですねえ。子供たちは「おかあさん、いつ寝ているの？」と思っていたのだそうです。

そんな働き者のおかあさんの姿をいつも見ていたあんちゃんは、「自分がやらなければ誰がやる」と子供心にそう思ったといっています。やっぱり、長男って、おかあさんの苦労を知っているんですね。

そんなあんちゃんにも好きな女の子がいました。幼馴染のきれいな子です。

中学に入ると、小さい時から、いつもあんちゃんに親切してくれたやさしい彼女と一緒に高校に行くのが、あんちゃんの誰にも告げていない密かな夢でした。

彼女は勉強もでき、あんちゃんの家よりはるかに裕福な家に育ったお嬢さん。

でも、それが叶わぬことだということは、あんちゃんは百も承知でした。家が貧しいからです。

(俺が高校なんか行けるわけがない……いいんだ、俺は)

でも、あんちゃんはせめて模擬試験くらい、と思って、教師や親が子供たちの進学先の高校を判断するための試験を両親にナイショで受けました。親には中学を出たら働くと言ってあったから、余計な心配をかけたくなかったのです。

その結果、あんちゃんは彼女が行くという、その地域で一番優秀な子が集まる高校に合格するだけの学力があることが判明したのです。

(ああ、俺はこれでいい。これから彼女といっしょに勉強はできないけれど、彼女と同じ学校に入学できるだけの学力が自分にあることがわかっただけで、満足だ！)

あんちゃんは、すっぱり、高校進学を諦めました。すると、学校の先生が言いました。

「お前、先生がおとうさんに高校に行かせてもらえるように掛け合っただけよ。」

「いいんです、先生。親には何も言わないで。僕は、中学を出たら働きますから。」

先生がそう言ってくれたことも、親にはひと言も言いませんでした。それから、あんちゃんの奮闘がはじまります。農業をやりながら、製材所に勤め、一家を支えます。

父親は、長男が働き出したので、ますます安心して、農民運動に没頭します。

そして弟ふたりをあんちゃんは、自分が行けなかった高校に行かせてあげたのです。

学費はもちろん、小遣いまであげて。やがて、その弟たちも就職で東京に出て行きました。

あんちゃんが勤めていた製材所も、やがて、不況のあおりを食って倒産。でも、あんちゃんはその時に働いていた従業員全員の再

就職先を探し、見事に全員、仕事を得ることができました。でも、自分の仕事はありませんでした。「あんちゃんなら、雇う」というところに頭を下けて、仕事の見つけられない仲間を斡旋してしまったからです。

いま、あんちゃんは行政と交渉して、全国の高校生に農業実習をさせる農家民宿を提案し、毎年、各地から高校生を泊めさせています。自分なりにたくてもなれなかった高校生の笑い声が、何よりうれしいとあんちゃんは言います。

先日、東京からひとりの女性が偶然、あんちゃんの民宿に泊まりにきてくれました。一関の出身で、しかも同じ年で、卒業した高校があつた学校。思わず、あんちゃんは尋ねました。「〇〇さんって、ご存知ですか」「はい、同級生。仲良しでしたよ。」

子供の時に一緒に遊んだ、憧れの彼女の高校時代の同級生が目の前に。あんちゃん、胸が熱くなったのは言うまでもありません。でも、それでその話をやめました。

岩手県一関市藤沢 農家民宿「観楽楼」主人、佐藤静雄さん。一生、結婚することなく、弟や妹を育て、最近まで寝たきりの父親の介護を続けていたあんちゃん。いまも、ひとりで民宿を経営しています。一度、訪ねてみるといいですよ。「あんちゃん、来たよ」と玄関で大きな声をかけながら……。

「今月はどんなお話か、楽しみです」と、人気の連載になった、この『にっぽん人情小噺』MOKUという雑誌に載っています。

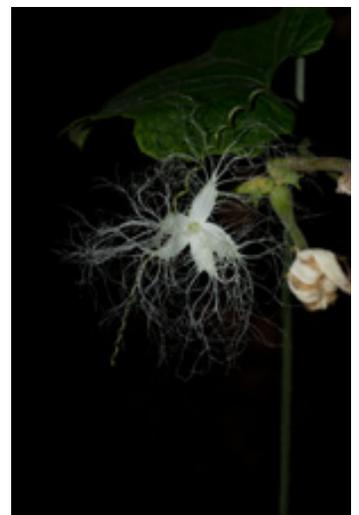
普通なら版權など、色々難しい規則があつて、転載させてもらうことなど、とても出来ないことなのですが、私の独り占めでは余りに勿体ないと思い、恐る恐るメールで伺ったところ、「著者に連絡したところ、どうぞどうぞと言っていますし、出版元としても異存はありませんので、ご自由に転載して皆さんに読んでもらってください。」という太っ腹のお許しもありました。

有り難いことです。

ります。ご近所同士の迎え火には、懐かしい顔が揃って、ひときわ話題がにぎわいます。1ページの写真は9年前のもですが、いなくなった人もいて、懐かしさと寂しさと、不思議な気持ちになります。

▼カラスウリ【ウリ科カラスウリ属】。芋のような根っこがあります。日暮れとともに、細い糸をはやした真っ白い花びらが、とても幻想的です。

木枯らしが吹き募る頃、濃いオレンジ色の5~6センチほどのウリがぶら下がります。鳥たちには余り美味しくないのか、何時までもツルに残っていて、冬のわびしさを一層募らせます。2015.08.10 龍彦



▼昔、お年寄りが「こんな暑い夏は初めてだ。」と、よく言いました。今年の暑さは全くその通りですね。長引いた夏風邪のあとのせい、暑さが身にしみまします。あと1ヶ月、お互い充分に気をつけましょう。▼この季節に、どうしても思い出すことがあります。アメリカの従軍写真家ジョー・オダネルさんが原爆直後の長崎で写した『焼き場に立つ少年』で、去年8月号で取り上げました。

この少年が私と同じ年ごろ、ということもあるのですが、死んだ弟を背負い、必死に悲しみをこらえながら、直立不動で火葬の順番を待つその姿に、あの頃の私たちの、負けてたまるかという心情が良く現われていると思えて仕方ないのです。▼泉さんのご主人は退役軍人でしたが、日本が敗けることを黙って見過ごすわけに行かないと、志願して出征し戦死なさいました。46歳でした。奥様は戦後の厳しい中、5人の遺児を苦労して育てました。泉さんに限らず、レイテでも硫黄島でもサイパンでも沖縄でも、或いは特攻隊員として、日本中が同じ思いを持っていました。

この人たちが礎(いしづえ)になってくれたから、日本は滅びることなく、経済発展できました。私たちにこのことを次の世代にしっかりと伝える務めがある…そう思います。▼お盆になると、過疎で年寄りばかりの集落が急に賑やかにな

余滴